



掌中嵐雪叢句集  
編二  
全





掌中嵐雪發句集二篇

春之部

改旦

名目也 漸くうらうらう新あり  
年すてふもあきく 進戸乃鹿目うさ  
三つの朝 三夕昔を ことごとくえん  
恙水又 智恵の蹟を 磨くうさ  
何れも 出ても 沈障をおしむる



襟乃世所殊 死ありやまきくはく  
夢のく浪ありとありや 泊眼寺

暗月はく免乃めれとらさるひ

んよ笑われ侍りて

よろこぶをさよや はつ初めの玉はく本  
重なる苦くよ重なる樂なる若菜は

懐蕪之客中

裾折く葉を つとあつん草枕

春朝

蔀めけてくまきり雲ん初より  
風渡くふよすかれる 若菜う那

雪

雪をさあつて六さく 村よと免  
うらみはの霜とくそ見れ小摺袴

外籠梅

白雪新籠を 洗つむや 梅の影



籥子結ふ梅をぬけく月夜に

荏柄天神ま納

こられ梅よこしけまこ結まひ

翁の春もやあしこも結ふと

や結まれし白きを逢はゆり

これ梅を逢ふ月夜にひの

梅に志也見知りて存る梅の花

柳

目あり枝はく結まや 柳かけ

中納ま孫房

於馬場殿龍馬よ付て直陳公

ま孫房し其言行未如續

乳子屋ま風の柳をま孫房

春の水ま秋の本葉を 柳 鮠

狗脊乃葉まあしわひ

ま孫房や火燧のま孫房



昔風乃石紙引切くうれり南  
びるを門人まらうう様立らるま  
端石を移るとかかやそれしと

第根よそ

う屋の了 関と忍我れ勢きり

紙書

糸つるる人と括ふや 風中  
沙弥惟然へり移るう侍る

木の枝子とほりかゝる 風中

我等今日聞佛音教觀喜踊躍と

強誦しきり

姦しひう念佛おとり乃柄抄り

出うまじ

出かたりや初ら年とら河をれ

まき種飯

相柳 民流<sup>コヤカ</sup> 年<sup>コヤカ</sup> 菜飯<sup>コヤカ</sup> 那



上巳

隈く雛えとくくお家外

汐干よ

あ莖の馬刀おさあんあまの鞘

桃

わのくわ桃の席カシや等持院

あま

わくわそや爪わくわくわくわくの山

逍遥鸚鵡之間出入是非之境

花のあ世身をるるるりまけりり

花らふも毛虫ふわくしあま様

ふれ河出く松へあまあまあまの那

新あまう花折あまや山あはし

小町賛

我あま目も鼻をあま又花の色

原の霜を通ふ勅使のあ京まああま



海道も雲をけし山も野をみれり  
りふを晴とけし山も野をみれり  
よれらるふを晴とけし山も野をみれり  
れらるふを晴とけし山も野をみれり  
人とは合れり後よふ合とあり

富士をよみぬあつ人も何れん花の山  
あつ人も何れん花の山  
あつ人も何れん花の山  
あつ人も何れん花の山

立志退善

山ふさこのうつりく黄ある 泉う那  
えまの義と普化の師 晋子の修海の  
怨子三十年來の面平かき筆をまじして  
他のつらさをせむれし未劫より及く半日を  
吐けりしに遠跡を止めし身をまじりて  
あつて大聖虎へ春吟より宛

中陰廻向



普化去りぬ白ひ残りそ花乃雪

七跡

葉の花や坊々灰まろく果らみそ

三七日

雪や弓よと波りそ法の花

墓系

山ふきの實を穴塚乃獄ひし

夏之部

更衣

まじりし衣傍より法をし自かき

初去りし身

老ひし川を色紙荷みし更衣

伊勢法樂

あけぬまの松杉をくま 郭 公

綿脹の鶉世をよみ戸や蜀 鬼



たらしをれを喰ひも法をりし時を

冠里公

ありあゝやまを中り山乃郭  
時をゆきを吐け根付り那  
砂さるを賣付けてゆけ時を

卯花

花もやうく免うときぬ花卯木

信田の君よ或傳をよ

や中れ遊を人小教へよかき法を

牡丹

その纏盛なりくきるなんか

義仲寺師父之廟

急とくもあうりりか青わじ

新樹

葵鯉をけし新樹の烟を

孫余を鶴ヶ岡



並松の行列のりりり及木立

まを松菴うら

菴の表もみりりり成ぬ少りり

うら、森の表もみりりり 鶴子 晋子

そまよ戯る

下部等より、纏くハする日守佛

内外の跡并終りて終極のまの

奥より八十形をりりりぬ塵外ハ里

の山陰うらて表の表に合殿跡を寄生

うらとまのりりり松のりりりまをりりり

いとがくまのりりりまをりりり

跡まをりりりりりり山ハ奥

氷花へ祝養流りりりり

沢源りりりりりりり能子うり

箏

井の子や兎の齒くさずりりりり



悼青流亡妻

想とるに素よりさあめのかきすひはけ

蝸牛

公氣病や角は目をまの蝸牛

坂車の上よき海りまるとに撫木をたはる

火とくき屋の隅に具足と太刀の埃よ

まじりてくゆるまるとをたはるまをたはる

あつとるひきれたまのちのちのちのち

うりかき具もさぬ家持のちのちのち

なめまじりて遠くまのちのちのち

大津の驛におく

あちまを五巻り盛るまのちのち

大津の橋を入集のちのちのち

州東みまのちのちのち

あちまのちのちのちのち

端午



一乃刃せんちや多々の九節  
わや先ん多々茂の能摺りまの哉日  
多々ちやくりよもちやく 繰又把  
顔よりほく版粒蠅耳あそへり

獨座

多々のちやく 繰り 塊乃折あ  
うち歌く事侍りて  
多れとよを外まふぬ故知り那

旅意

萍の實もいさだより 水 驛ミヤ  
紀の山きぬ清海より江に入る馬益乃  
多々流く美物とある世も清外山表か  
わりさぬルカホヤヤちとりのかま津橋根の人  
あつら画よ多々見たり目前より南の多々  
洞よかまればは不子走るを鬼もせよ人雨せ  
あねねらふ多々藤森之



蛇いちこ書弓提く交婦へれ  
和らぬ云初と云塔  
本交りつて一里彼武部の月のさつり  
ゆきふとよ

蛸のさくそを縁をうらまのりしま  
和らぬ云初と云塔  
十津川近き跡のさ乃ほろり之跡田  
百又十石代かろり家たたりをれとさるん  
今も平家之

川骨乃花一時もさ家初とよ

妻驪詣 文アリ略

荊の花裾さうらり旅さるも  
梶原をさうらり世人をさるり  
又等まの遠せられも秋も縁物の情も  
とれる人も初ふりの早もさるり  
まうしをさくきも初もつらさるり  
一族をいふかきも初もつらさるり  
まうしをさくきも初もつらさるり



むつろしき中よ暮もわりのほつみの花

瓜

見のふりむおもあまる 志素お

清堂園白殿法相忌よ家朝臣系籠

のめ南苑より早瓜をそとまうりし不博士

毒気あふりしをりて家朝臣作ら瓜を

割そるに毒氣則出下略

瓜切くさひぬ飯乃 光の南

水花を妻うしあひきるすし

とそぎ

あそし子とみ粉たしるも散しす

左盤木のちるや母さん 子さん

うちを替るおと強ひけり

山鳥のちろくちさきやあ月五

耐るの二起り三起りおしはまこりれ

又りぬの指居るをそ平家どうなる



亡母を夢見る

有りきと我 兼虫や母恋し

伏見権本所

炬松ありて世をよりもたふ家ありの

古風ありし

引籠るきり秋送る秋ありし

明くのくおちと依んや夏の月

叶菴むしひゆるとて

夢うゑ家頼よむはぬ先の白雲

かゝるの涼

来るもの影も水流ふすくみる那

埋火を涼とあかき秋の多

一様貴族もて皆ゆく申すまゝ

ゆりき

味増すらんすゑ緋の遊う那

祇園の會社七日の祥光の山姥より



綿より見えぬあるは萩州いりし松尾  
まのむら素袍は太刀をこきそ四糸を余の  
辻不彦丸を居れそ下難式おきりし及そそ  
その後さみする後持ふことみかちんよ下  
きる男等そ深の指とる子に持て給せ  
けくろひ非老せりしむ善く定められ  
とる一二の園を改めたる威儀厳重なる  
申ふけしこと曰し車は後そ町とん引る

何の用よりけりせん

まを白もやもれ彌や後筆の會  
移徒の流美り

とこあつ乃家又いそたる徳利式

清水 相去あり略

抜けりあめそれ清水あひ片系鞋  
序合流洲ちるを侍りしそ系よそ  
大和強うけ多和秋のたそつんと坐立



けりを添けりし

神奈川の谷乃清あり先進め

紀伊郡中々清水播州は同名あり

すまうひく道まてあつら山清水

采の菴

夕まらや陸子くけある斤ひさし

野しらに

すく後ら相恵のさくは夏尾苑

切味喰のひまこ身さき夏泊り

芭蕉の暮まわりのほみし夏仲菴へ

あつらひくさるる産ま出奔せしれれえ

任持まを拂ひ果りり夏所を

秋之部

初秋

洛外乃辻堂りり秋の風

雨居



瘦る身をさへもふ似たり煉の風  
 大伽藍造営ましくりる寺のともなき  
 おもひ付きまに富士築波根の万葉  
 山はつゆ来とるくとそのおわひもちく  
 成（ま）かともありたり  
 上野よき乃や付く人限河  
 浪流のけろもよ浮や早使  
 名月の表といまうんはつりさし

七夕と降と思ふうらさ世う那  
 七夕や笑茂川もよ牛車  
 さもあらしもれを流ふ天の川  
 薄のさきそまのりそ  
 暖湯中の淋しさうるる落る那  
 茶碗銘  
 煮茶碗あり花の釣とまほしく落る  
 煮茶碗あり花の釣とまほしく落る



さくや園秋子鼻をとろれとねく  
つらみくらのまゝとあまへし

檢校 貧僧 大黒 小くね

ちんの子 ぶあひ 小雲舟

三代目をせんそりのせこくそ  
かき味めれ秘してあはく残を

松むしのせんともいふは 系系碗  
底念木香わりの湯と強く地獄めり

いよと有りあつて世道の湿化蝶情の  
善をぬりまらうと

おのれえ 俄鬼と似らるよきらしくす  
十歳子成る童のめはうりらるん  
弱きりのもとのあやめ 未乃あ

鶯

味唾ろく若ろく 喰らふとほし 鶯  
鶯 鶯のたきさる 鶯 う那



妻悼

尸うね拵授かるるやおとまりし  
蓮の骨あはれを美女の尸うね  
里衣娘うゝまひきるよをに  
鬼灯のこまれをほふも秋の

盆會

魂初を落も涙をわらう那  
鬼まうり母屋のまゝ戸の音ハ何

相撲

角刀とり並ふや妹のかゝ綿

秋暮

立あそびうゝ後歩や秋のえ  
まにかゝく吾面くまう秋の暮

定家

舟多うゝと侍屋の秋の夕う那

草誓上人之岩室



燕乃かたうらまらありあゝの面

江豆膳

日をおこ海士の胸くや初あじし  
江の魚の穴をうまうや秋の夜  
鶯ヶ岡の枝生禽をうまうて待春  
の月うけえ雲は下りやうみ作りは楽の  
笛よ秋風うらうらぬ明きハ朝露の本は  
万きへくよ楽人をあはしくけりむ社傳

雲よ砂をまねおさ出る神のこゆるの  
煮きなる平陸下藝志つまむ松の嵐  
もあうをとくめぬ

烏帽子とあはしく白さめは皆小田の

月

名月や柳の枝ををく吹く

旅泊

残るるをうらま五とよみあうを



仕合なき岨の松う那りあのみ  
喜をよみ松を書きりりあおれ

清涼繁葉の初つたよつて

とかれをり中よ

新月や内付不乃 株の草  
名りや歌人よ 蕪のちたがて  
まき<sup>キヤ</sup>の吐と鳴くぢあのみ  
名り結固友材を 男の那

去真さ 綴るをあつてりあのみ

鎌倉大佛

明月を南をゆきり 佛頂珠  
名りやあつてりあのみ 蕪のち  
名りあひあつてりあのみ 人あつてり

月あつてり

野あつてりあつてりあのみ 秋の月  
とあつてりあつてりあのみ 磯の月



題しらす

八九月風やいつそのわく乃貝  
穂よやくそ毒の中か田も疇もほし  
あきも新さひりりあま山里冬

月とる暗

杉石よあふ柿をぬる翁うね  
穂粟や子よさけさる法の場

秋のなれ井子の煙乃わくどらん舟竹

といふく土産糸とれりるり人丸の柿の実  
山のきり栗のかつふの地まのくあまうあると  
笑真しあ

榎のかくよう形う山乃あお實見と

標第

林間よ焚焼する目とけあめ免  
くち本となおけめされそ板草

菊



茶浪子のそとたえり岸  
一多移りくひるもこそ菊の糸

啓下圓哲子一燕ス

さく子香よさる山路の香踏  
山路あるあちや菊よ板しり  
さく流のやまこき魚の鱗

何ちの鱗

ま川風の里を扱するしりれり

病床の風をとる辨

あくは身気いりさる糸の程うさ  
くとしはるか飯はふのましある物  
さすりあちをえり疾くもた上よ教し  
そめちめり糸二重よあて渠うさゆせ  
窺ひ見ると白と肉黒さ腸呼吸す  
はまそ動揺ゆるく眼ささしくと見え  
はまよ川六川めりさく怒けるる獲摩



堂は海にまたぬ王尊は似あり虎も  
 我ひ龍と毎争ふるは徹や必死の人の  
 命ふかあり戻りて何さむきありむと  
 了ふ本州より是とれいまと死すさあや  
 あり強ひむきく行忍ろーととれとさ  
 けも荒れおのれ次めおきての虫はねと  
 れるおれは歌うとぬを死のをれをれを  
 今も身からううへ侍宵のあらまひを

ふく糸やいまへさむ表虫はゆりたる鬼  
 の子ならはうかく世よりと果れれたる  
 業せのやとこといと拙多れ真様の中よ  
 質を清く禪は潜りぬひ光よかられく  
 人乃血氣を犯し吸ふと被子の鐵牛  
 を噛むよを程をくそけを涯の強ゆる  
 不さ火とりの中よ神とらうと死ひ本  
 枕の角よかきとと恥をへはくさぬさか



真如の性乃もてする半や摩竭をふり  
 ける魚乃大百中旬より無量の微  
 細なるまをて行もてして憎愛かする事  
 れしとあふ見ゆれ肉重よも折折け家  
 即し正の浄灯の光よ一夜あつと拾  
 ちれまざるに物の化然こと流りるる事  
 知識の肌す訓まもひく徳をかれ  
 ういふれなるもさるへき因縁も柱力

穴よ生をたけりく多回年の怨人よん  
 報もともちもかれさけいふよゆしてん  
 かさあひひひり強そりあつとといふち  
 木のふるりあけくともあつと見ん  
 兵もしつるつと強そりあつと見れと  
 れし測し物落せし人の熱しを  
 ちりあつと見んもあつと見ん東  
 雲の飛もあつと見んてぬ自身坊衣被



りしむら

阿さく本のむりしむら

冬之部

續大志

神の留ま娘女房をきふへ

あ川亭よそ

木くりのわらうまきく

時辰

系と葉く時辰のまきく

深谷やあさる時辰のまきく

系よそ

かきんあさる系あさる

近袋不記く系あさる

法華をきく

況著世樂無有慧心

はとあさると親もあさる



多ましく又別人の有赤大根  
午とりふ一子不歌

萱原や枯くけろひく馬乃陰囊キニ

水多

玲鴨の飛かり流る舟冬く  
萍又何を陰甲くりけ乃かを

影夷篠

籠汁をつるく叢平落るたう歌

海嵐

海嵐 吟ふはき多ぬいありお優達

海嵐多々みもむつうき世ぞ独作

雲

門の巻白とたうひのすくころ那

井の巻百歩の馬屋えんはかせり

御築地のうちらどおろく侍りおるるや

ぬきこり嶽よりおる月の菊門よかきとて



うたひたりく知てさうりなれを

かゝる花は月をこぼれにさひくう那  
菓の盆やともけり免いろねをさあれ  
沢菴ののれ航せりや 香ののり  
花ありと知らば 香の 光の那

を教

武士の足く 来さくわられぬ  
神をさき

今あり一 手よりうんこ一 神押

赤瀬う子もてるに中世は

津ささきの倅よ赤子や 子の香  
おもへとも也 泣れ笑りれと一の香  
と一 秋 轆 殊さ一 日乃 嵐  
人汁粉 さまて 浮世まわりの  
そせ 沢菴の 芭蕉もいあこころのくし  
かりきる 秋 相の 紫の一 紫ととさう



踏くさすきんと木のいもくれつりそ  
 鈴本しとよむ人様くしきのられ  
 み十をうりの古猫の胤もとくはちりて  
 老よいろりよ鼻さしくるまきと  
 かりありあましくしよ南泉乃刀を  
 のうれさる世身の幸うしとよもきぬ  
 いづれも此猫きてきよよやくのられ  
 新の枝梅を探るにおほくうやう

江戸本石町十軒店 萬笈堂英平吉藏

其角發句集 二冊 嵐雪句集 二冊

蓼太句集 六冊

俳諧文集 二冊  
蟹守大人輯  
 尚附る名の俳人の文珍輯

發句古今撰 同輯 附葛里連句集 三冊

俳諧新五百題 護物大人輯 二冊



新五百題 後編

同輯

二冊

發句類聚

蓼松大人重校

二冊

發句類題

雪中菴大人輯

二冊

發句五百題

白雄房撰

二冊

俳諧恋の志をとりま

律雪庵北元大人輯

二冊

この恋をとりまは恋の志をとりまの初巻なり  
恋の詞をとりまは恋の志をとりまの二巻なり

俳諧手焼灯

季考の書と

二冊

袖のくさ

季考懐中小本

一冊

俳諧四季名奇

懐中本流巻摺  
季考大成より

一冊

俳諧季考の便覧

懐中一冊摺

萬葉用字格

春生上人撰  
万葉集の初巻

一冊

定家卿の形巻

一冊



今古の形を

喜井八穂大人撰折本

一冊

尚古の形を

山本明徳大人撰折本

一冊

対照の形を

善波る大人撰折本

一冊

音便撮要

喜望上人撰懐中本

一冊

子島の跡

中臣親満大人撰

一冊

此の古と色紙短尺の書とをせし懐紙  
もとの紙と人の書とをせし懐紙



